



学校法人
鎌倉女子大学

熊本へ、そして明けて沖縄へ

平成26年11月11日（火）、秋日和の熊本空港に降り立った私の心の高ぶりを3ヶ月以上経った今でも思い出します。

きっかけは平成25年の9月、本学の「沖縄舞踊愛好会」が出演する学外行事を観に行った時、声楽家の大庭照子さんと数年ぶりに再会し、一緒に舞台上で「ふるさと」を歌った折のことでした。

「童謡を未来の風に乗せて」をモットーに全国を駆け巡っておられる大庭さんが、今度故郷の熊本でコンサートを開くということで、私にも声をかけてくださったわけです。九州在住の卒業生にお目にかかれることもあり、計画のころからワクワクする思いでした。

会場となった「鶴屋ホール」で、足を運んでくださった大勢の方々とハーモニーを楽しみ、その拍手に応じて思う存分歌って、大満足なひと時でした。

熊本は柳原白蓮女史とゆかりの深い土地、舞台上で請われるまま、65年前を回想し、当時の義母松本千枝子への心のこもるお手紙や、私に寄せられた温かいお心遣いなどをご披露しながら、熊本の方々のお蔭で白蓮先生への感謝の念が蘇ったわけです。送られてきた次の日の新聞に写真入りでこのことが報じられていて、恐縮の至りでした。

コンサート終了後、卒業生の皆さまとの和やかな昼食会が開かれ、学生時代の楽しい思い出話を伺って、笑いあり、涙あり、長生きしてよかったと感無量でした。

出席をあきらめていらした久留米在住の有村恭子さんを車でお連れして、私との涙の再会を実現してくださった和敬会九州支部長の金子真由美さん、大勢の方にお声をかけてくださり準備を引き受けてくださった熊本在住の吉原伸慧さんはじめ、九州の各地から、そしてこの機会に関東からも、また赤ちゃんを連れて駆けつけてくださった卒業生～～、すべての方々に心より感謝しています。

ホテルの窓に見事にライトアップされた熊本城と、街のクリスマスの飾りとの楽しいミスマッチにジングルベルをハミングしつつ、昔と今が目の前に漂う、そんなステキな夜でした。

明けて平成27年2月8日（日）、再び沖縄の地に降り立ち、平成19年に訪れた時には、このように皆さまの前でお話をさせていただき、歌を歌う日が来ようとは思ってもありませんでした。

少し強く感じた風も冬の鎌倉から訪れた身には心地よく、「今日は寒いです」と出迎えてくれた卒業生たちと再会を喜び合いました。

昭和29年2月にパスポートを持ち横浜港に上陸し、縁あって本学で学んだ伊佐（旧姓

吉田) 仙子さん、山城節子さん、お二人の勇敢な行動があったからこそ、沖縄との今のご縁があるのかとあらためて身の引き締まる思いでした。

今年には戦後70年の節目の年、私は昭和20年8月15日、疎開先の御殿場でこの日を迎えました。小学校の一部屋に街の方とラジオを囲み耳を傾けたのですが、雑音が多くて天皇陛下のお言葉の意味が分からなくて、ただ「戦争が済んだ」、この一言で抱き合っ泣きました。あの日の富士山の神々しかったことは今でも忘れません。70年後、こうして沖縄を訪れて美しい海を見ていることを、その時その場にいた誰が想像したでしょうか。まったく夢のようです。

会場の「ていするホール」を手配してくださった「おきなわ女性財団」理事長であり和敬会沖縄支部長の伊藝美智子さんや、本学高等部2年生も修学旅行でお世話になった「対馬丸記念館」常任理事の外間邦子さんはじめ、多くの卒業生のご協力をいただいて、大庭さんのコンサートの第二部に出演いたしました。

沖縄の皆さまの悲しみを「ざわわ」という言葉で静かに深く表現した寺島尚彦さんの「さとうきび畑」の歌詞を朗読させていただきましたが、会場に足を運んでくださった方々の心が一つになったような気持ちでした。私は大学の「音楽の森」の講座の中で沖縄への熱い思いを込めて、命ある限りこの「さとうきび畑」を学生と一緒に歌っていきたいと思っています。

コンサート後の懇親会では、57年ぶりの再会を喜び合う同期生の姿や、関東近辺や北海道からも訪れてくださった卒業生の方々やそのお友達に囲まれ、幸せなひと時を過ごしました。皆さまのご尽力に心から感謝しています。

さて、5月には金沢に出向きます。

(学園主 松本 紀子)

[>前のページへ戻る](#)